

中高年看護師の職業性ストレスに関する関連因子の分析

6階東病棟

○ 中村 美保

1. 研究目的

各年代別に区分されている看護師と中高年看護師（35～50歳）の職業性ストレスが職務満足度とバーンアウトに及ぼす影響を明らかにし、各年代別の職業性ストレス、職務満足度、バーンアウトの特徴を明らかにする。

2. 研究方法

A県内3施設総合病院に勤務している20～50歳までのスタッフナース255名を対象者とし、平成17年8月9日～10月21日まで調査を実施した。集計結果はSPSSにて重回帰分析、平均値の差の検定を行った。

3. 倫理的配慮

研究の趣旨参加や中断については自由意志であり、それによって何ら不利益を蒙ることはないこと。調査結果は統計的に処理し研究者以外で取り扱うことはないため、個人の回答が公にされることはなく厳重に保管することを文章に書いて伝え、自己式無記名質問紙と郵送法での回収とした。

4. 研究結果

重回帰分析では26～34歳では職務満足度、バーンアウトの関連はなかったが他の年代は関連があると検証された。平均値の差の検定では中高年看護師は職業性ストレス、職務満足度はともに高く、21～25歳では職業性ストレスが最も高く職務満足度は低くバーンアウトに陥っていた。31～34歳は職業性ストレスが最も低いという結果を得た。

5. 考察

中高年看護師の職業性ストレス、職務満足度、バーンアウトは関連しており、41～50歳では職業性ストレスの中でも「働きがいの欠如」がみられ、21～25歳と異なるストレスが示される。この年代は看護の仕事にやりがいや誇りがもてず、自分の能力が発揮できていないため看護ケアに意欲がもてないと推測される。21～25歳では未熟な知識・技術、経験不足からくるストレスが職業性ストレスに変化し高くなる。この年代は自分で判断するよりも上司の指示どおり動くことが優先されるため、職務満足度が低くなりバーンアウトになる。31～34歳では師長からの信頼も得られ、中心的な役割を果たすようになることで職業性ストレスは低く職務満足度は高いが、今後職業性ストレスが高くなりバーンアウトにも陥りやすい傾向であるため、中堅看護師のキャリア開発を含めた看護教育も必要となる。

〔平成18年12月2・3日 第26回日本看護科学学会学術集会（神戸市）にて口演発表〕